

むかし、ある山寺で、子どもたちが、縁側にすわって、足をぶらぶらさせながら話をしていました。

「おれは、勇気があるから、どんな恐い物が出てきても、すぐにつかまえてやる」と、ひとりの子がいうと、ほかの子たちも、

「おれだって、つかまえてやる」

「おれだって恐くない」と、口々にいました。ところが、ひとりの子どもだけは、何もいわず、だまってすわっていました。そこで、子どもたちは、

「おまえは、だまっているけど、おくびょうなんだなあ」といって、その子をわらいました。すると、だまっていた子がいいました。

「みんなは、どんな物が出てても恐くないっていったけど、ほんとうかい」

「ほんとうだ。世の中に恐い物なんてないさ」

「じゃあ、縁の下に手を入れて、おれの足をさわってごらん」

そこで、ひとりの子が、縁の下に手を入れて、その子の足にさわってみました。すると、その子の両足を、毛の生えた大きな冷たい手がつかんでいました。子どもたちは、つぎつぎにその手にさわると、みんなまっさおになって、わあっというって、お寺からにげ出して行きました。

足をつかまれた男の子は、縁の下に向かっていいました。

「あんたは、だれだ。化け物だったら、そのままではおかないよ。用があるなら、出ておいで」

すると、縁の下から、美しい女が出て来ていいました。

「あなたのような勇気のある人は、今までいませんでした。わたしが足をつかむと、みんなまっさおになって逃げていくのです。じつは、わたしは幽霊です。勇気のあるあなたに、お願いがあります。わたしが死んで四十九日もすまないうちに、夫が新しい妻をむかえました。だから、わたしはその女を取り殺さなくてはなりません。わたしを夫の家につれていって、家の四方にはってあるお札をはがしてください。それから、このお寺まで連れもどつてくれませんか」

男の子は、

「そんなにいうなら、連れて行ってあげましょう」といって、幽霊を背負いました。幽霊は重くて、苦勞して、教わった家まで行きました。それから、幽霊を門の所で下ろして、家の四方にはってあるお札をはがしました。幽霊は、

「ちよっと取り殺して来ますから、ここで待っていてください」といって、家の中に入って行きました。男の子が戸の節穴からこっそり見てみると、幽霊は、女の胸の上にすわり、女の口から黄色い糸のようなものを引き出して、くるくる糸をまくようにしてまきとっていました。

やがて、幽霊が門の所にもどつて来たので、男の子はまた幽霊を背負つて、苦勞してお寺にもどりました。幽霊は、

「どうもありがとうございます。お礼がしたいのですが、あなたは、何が好きですか」とききました。男の子が、

「おれは、力が好きだ」というと、幽霊は、

「では、あなたに、千人力をさしあげましょう」といって、消えました。

男の子は、

「きみようなことがあったもんだなあ」といいながら、帰つて行きました。すると、歩くとたびに、足が地面にめりこみます。家の中に入ると、床がこわれます。男の子は、お寺にもどつて、

「さっきの幽霊さん。出て来てください」とよびました。すると、幽霊が出て来て、

「何かご用ですか」ときました。

「千人力をもらうのはうれいけれど、歩くと足がめりこむし、家の中に入ると床がこわれて困ります」

「では、あなたが、力がほしいというときだけ、千人力が出るようにいたしましょう」男の子は、お礼をいって帰つて行きました。

つぎの日、男の子が海辺を歩いてみると、大きな船が砂浜に打ち上げられていました。それを、何百人という男たちで、水に浮かべようとしていました。けれども、船は少しずつしか動きません。それを見て、男の子は大きな声で笑いました。男たちは腹を立てて、

「おまえ、どうして笑うんだ」といいました。

「そんな船を、何百人もかかって動かせないからだよ。おれなら、ひとりでかつげる」

「なんだって。この船をひとりでかつげるはずがない」

「おれならひとりでかつげる。でも、この船を水にうかべることができたら、何をくれる」

男たちは、

「米百俵やろう。だが、そんなうそをついて、船を動かせなかったら、おまえの命はないぞ」といいました。男の子は、

「いいよ」といって、みんなの前で、船を持ち上げ、運んで行って水にうかべました。男たちはびっくりして声も出ませんでした。男の子は、米百俵もらつて帰つて行きました。

それからというもの、男の子は、千人力を使って、みんなの役に立つことをしたので、「親分、親分」と、したわれるようになったということです。